

先輩が教えてくれたこと

宮城県栗原市立志波姫中学校

三年 梅津花帆

もう嫌だ、やめたい。今、この場から離れたらどんなに楽だろうか……。止まりそうになる足を必死に動かしながら、心の中ではずっとそんなことばかり考えていた。

中一の時に初めて参加した駅伝練習。噂には聞いていたが、予想を遙かに超えるその辛さに、毎日毎日、憂鬱な気分を取り組んでいた。他のことをしていても、必ず浮かんでくる練習に対する恐怖。その日の練習が終わってもすぐ考えてしまう「明日はどんな練習をするのだろう」という不安。練習がある夏休みの期間中は「駅伝嫌だなあ……。」というのが口癖になっていった。指導してくださる先生方は、「昨年の自分を超えよう!」「互いに競い合って」などと声をけしてくださったが、練習についていくのがやつとの私には、タイムなど気にする余裕さえなかった。

ある日のこと。その日の練習は三十分間走。三十分間、ただひたすら校庭をグルグル走り続けるという練習だった。休み明けの練習で、いつにも増して足取りが重く、私はもう歩く寸前、というスピードで走っていた。早く三十分経たないかな、と祈るような思いでタイマーを見ると、まだ十五分か経っ

ていない。泣きたい気持ちになった。もう嫌だ……。足が止まりそうになったその時、「ファイト!」という声が後ろから聞こえてきた。先生かな? と思っていたが、その声は止むことがなく、「頑張れ!」「あとちょっと!」という声も混ざっている。さらに、その声はだんだんと近づいてくる。

声の主は私を追い越す際、つまり私に対しても、「頑張れ!」と言ってくれた。かけられた声に顔を上げると、同じく練習に参加していた三年生の先輩と目が合った。なんとその先輩は、走っている生徒一人ひとりに声をかけていたのだ。

先輩だって辛いはずなのに、どうして? そう思った。けれども同時に、今まで重かった足が、なぜか軽くなっていくのがわかった。自分も大変な中でみんなに声をかけながら懸命に走る先輩の姿を見て、「あとちょっと頑張ってみよう。」と思ったのだ。

その日を境に、私にとつて駅伝練習は、大変なことには変わりはないものの、嫌なものではなくなった。先輩にかけられる声を励みに、頑張ることができた。チーム全体も、声をかけてくれた先輩を筆頭に、一人ひとりが自分の限界に挑戦し、また、それを超えるべく努力しているような雰囲気になった。新学期を迎え、全ての練習が終わった頃には、私の胸は、達成感と充実感でいっぱいだった。

先輩のその声は、単純にみんなに頑張ってほしいという思い、そして自分自身辛いからこそ、声をかけることで自分を鼓舞したいという思い、その二つの思いから出た行動だったのではないかと思う。あの瞬間、私だけではなく、走っていた生徒全員が力をもらったのだと思う。

私は、あの駅伝練習以来、心がけていることがある。それは、辛い時でも自分のことだけでいっぱいにならないのではなく、そのような時だからこ

そ、周りに目を向け、他人を思いやり、その人たちのためになることをしよう、ということだ。励ましが誰かの力になること、そして自分自身の頑張る力にもなることを、先輩に教えてもらったからだ。

テレビで流れる、大雨や地震などの災害による目を背けたくなくなるような被害の状況。そんな中で、人のために行動している人々がいる。私も、そんな時に、誰かのためになる行動をし、誰かの心に届く言葉をかけられるような人になりたいと思う。きっとそれは簡単なことではないだろう。現に私は、同級生以外に言葉をかけることをためらってしまうからだ。

しかし、私は身をもって経験した。応援された時の嬉しさ、そこから「頑張ろう」とやる気が出てくる時の喜びを。あの時に私が抱いた感情を、次は自身の行動で、多くの人に味わってほしいと強く思っている。人は一人では生きていけないからこそ、他の人の支えや応援が大きな意味を持つのだと思う。

「頑張れ!」その一言が、あの時感じた言葉では言い表せないような思いが、どんなに私の心の支えになったか。頑張る力になったか。生きていく上で大事なことを教えてくれたか。

あの駅伝練習から、「いろいろなことにチャレンジしよう!」そして「壁にぶつかっても頑張ろう!」とくじけなくなった。

けれども、私はまだまだ道の途中。これから前進していく中で、その足が止まりそうになることがあるかもしれない。

そんな時は、あの日の、あの言葉を思い出したい。自分のためにも、誰かのためにも。

「ファイト!」「頑張れ!」